

作品「舞姫」が私達に教えていること

私がこのテーマを選んだ理由は、この作品の中に登場する人物に興味を持ったからです。豊太郎の目線からさまざまな経験が書かれているので、この「舞姫」という作品がそのような登場人物を通して何を伝えたかったのか、何を言いたかったのかを考えてみようと思いました。まず、日本へ帰る船の中、豊太郎はひどく心を苦しめられていた。なぜ、そのような状況にいたったのかを考えていくとともに、最終的にそのような状況になる過程、心を苦しめられる結果となってしまったことから何を伝えたかったのかを考えていくことにします。私は「自我」というものをちゃんと持ち、貫き通すことが大切であるということ「舞姫」は私達に教えているのだと思いました。

豊太郎は帰国の途中、P264L2「腸日ごとに～我が心を苦しむ。」より、心の奥に凝り固まって、一点の影とばかりになったものの、何かするたびに、限りなく昔を懐かしむ思いによって心を苦しめられていた。これは、やはり豊太郎自身の心の中のどこかに後悔の気持ちと罪の意識を持っているからではないでしょうか。

豊太郎は P264L12「余は幼き～受けし」や P267L8「余は父の～学びしときより、」などからも分かるように幼い頃から厳しい家庭教育をうけ、母の用意した「エリート」の道を機械的に進んできました。しかし、ドイツへ留学し自由な風潮に影響され、P292L12「独逸に来しはじめに～誓ひしが、」とあるようにもう機械的な人間にはなりたくないと感じ始め P269L11「よそに心の乱れざりしは、～縛らせしのみ。より、それまでは何をするにも勇気がなかったため、様々なことを避けてきていたが、P272L6「我が～勝たれて、」いつもの臆病な心を打ち負かし、エリスを憐れむ情が打ち勝った。何をするにも勇気のなかった豊太郎が行動を起こすことができ、それまで豊太郎を縛っていた臆病で弱い心を抜け出せたのも、エリスと出会ったからだと考えられます。さらに、それを契機に豊太郎は「自我」というものを意識するようになります。そんな時、免官になってしまった自分を助けてくれた友人、相沢謙吉が登場します。相沢により天方との話は進ん

で行ったが、豊太郎自身は、P288L7「さてうべなひしうへにて、～しばしばなり。」より、「自我」を表面に出すことを我慢し、それまでのただ人の話を聞くだけの機械的な人間になってしまっています。しかし、P287L5「余は守る～」より相沢により「天方の信用を得よ。」と言われ、また、「エリスとの関係を断て。」と言われ、豊太郎はそれを断れずに承諾する。また、P295L1より相沢はそのことを天方にすぐさま報告した。それにより、それを知って安心し、豊太郎に「一緒に日本へ帰らないか。」と言ってくれていたため、天方の申し出を断れなかった。このようなことから、機械的な人間に戻らせてしまった原因を作り出したのは相沢謙吉であり、豊太郎自身の弱い心であった。その弱い心によって日本へ帰るという決断をし、エリスを生ける屍にしてしまい、豊太郎自身 P296L8「我が脳中～」より自分の弱い心に罪の意識を感じたと考えることができる。P292L11「ああ..」と嘆

くように言っていることから豊太郎は「自由」そして「自我」を見つめることを望んでいたのではないのでしょうか。このようなことから、相沢に対する憎しみには、エリスにすべてを話し生ける屍にしてしまったことだけでなく、豊太郎の中に目覚めかけていた「自我」というものを抑え込まざるを得ない状況をつくったことに対する憎しみもあるのではないのでしょうか。でも、その中から「自我」を貫き通せば良かったという後悔の思いが読みとることができます。

この作品の著者である森鷗外自身、19歳で東京大学医学部を卒業しており、ドイツへ留学しています。また、その時エリーゼという恋人がいたということから、「舞姫」に登場する豊太郎は、少なからず森鷗外自身の経験や体験が組み込まれていると考えられる。

このようなことから、「舞姫」の最初の部分より「人の心の当てにならないのは言うまでもなく、この自分の心までがいかに変わりやすいものであるか」というのを豊太郎はもちろん森鷗外も思い知ったのではないのでしょうか。森鷗外も豊太郎のように、人生に大きな後悔・苦悩などを背負い生きていかななくてはならなくなったのだと思います。そうならないためにも、自分自身の「自我」を理解し、貫き通すことが大切であると、「舞姫」は私たちに伝えており、それはまた、森鷗外自身がつたえたかったことでもあるのかなと考えました。

まだ、森鷗外について調べ切れていなかった部分があり、森鷗外と豊太郎を重ね合わせ考えてしまってもいいのかは疑問として残っています。

使った資料:「舞姫・口語訳」、国語便覧